

## ルネサンス・レフォルマチオン期に

(上)

### おける所有観

高 橋 良 三

—

いわゆる近代的世界の成立は、あらゆる意味において、中世の世界からの脱却を物語るものであり、その発端を飾るものがかのルネサンス(Renaissance)と宗教改革(Reformation)とであることは人のひとしくみとめるところである。ルネサンスも宗教改革もともに中世的世界に君臨していた法王的權威に対するプロテスタの意味をもち、ともにカトリック的の統一文化の解体的契機となったものである。人間と神 $\parallel$ 超越者との間に横わる法王的ないしは教會的權威を否定して、人間をエホバに直面せしめることによって人間の高貴と尊嚴とを擁立したヒューニズム(Humanism)の現成である点において、この二つの歴史的運動は同じものの異った顯われてあったということができよう。そのいづれもが、新しい人間の發見であり形成であつたけれども、そこに見出され創造された人間が必ずしも同じものでありえなかつたことは、この二つの運動が発生した場所もその歴史的背景もそれぞれ異つてゐるところからして容易にうなずけるところである。

封建的擄取と戦争と疫病とにさいなまれた中世人の眼がおのずから天上に向けられ、彼岸における救済を期待

するところに宗教的支配の温床があった。中世思想の宗教的伝統主義も中世社会の孤立的停滞性も封建的生産關係にその現実的基礎をもっており、後者によって前者が規定され、この基盤をゆるぎないものとするためにそれらが構成され維持されてきたものであることは、今更、あらためて説くまでもあるまい。したがって、封建的生産 $\parallel$ 所有關係が中世の農民ないし一般人民にとって極度の重圧を加え、切断せざるをえぬほどの桎梏となつたとき、その専制主義、伝統主義、權威主義は当然に打ちやぶられなければならなかつたのである。近世初頭の西欧各地に澎湃として昂揚した人民闘争こそ、神学から解放された哲学や宗教的權威と対決した近代科学が誕生する陣痛であつたといえよう。これらは、封建的抑圧に対する農民の反抗や、農業における労働分化の所産としての商業および産業労働の發展によつて形成され近代の都市の人民大衆による解放運動として打ち上げられた烽火であつた。ヘーゲルは世界史の發展を自由の理念 (Idee) の自己展開とみたけれども、われわれはそれが果して (Idee (觀念)) であるかどうかを知らない。しかし歴史の現実の發展が、少数者の自由からより多数者の自由へと、人民による自由の獲得のための闘争を變革原理としていることはこれを実証することができる。最も自由の乏しいところに自由への憧憬は芽生える。中世的支配の最も集中されていた地域、したがって、封建的搾取のために、さらに高度の經濟的産業的發達が阻害されているところに、變革が準備されたのである。

\* イタリアでは早くも十二世紀頃に發生した農民運動 Tughini、十四世紀フランスの百姓一揆 Jaquenie、イギリスでも同じ世紀にワット・タイラーの反亂がみられ、ドイツでは十五世紀に入つて広汎な農民戦争がまさおこっている。その多くは宗教的異端運動と絡みあつて、中世の教會的封建秩序に対する反抗運動を形成していた。中世の終焉はまさこころした「行動」によつて用意され、自壞の方向をたどつたといえよう。(M. Peer; Allgemeine Geschichte des Sozialismus und der sozialen Kämpfe. M. Kowalewsky; Die ökonomische Entwicklung Europas bis zum Beginn der kapitalistische

Wirtschaftsform. usw., vgl.)<sup>o</sup>

僧侶は人間の靈魂を鎖つたが、君主はその肉体に鎖をつけていた。だが、鉄鎖はやがて断たれなければならぬ。ルネサンス運動の発端がまず、中・北部のイタリアにおいてみられたのは、上に述べたような意味において、まさに歴史的必然のことであつたといふことができる。この地方はすでに十三世紀頃から新しい農村分化が開始され、一方で隷農制から小作制への移行がみられるのに対応して、他方では産業労働の分化が進行し商品生産ないし工業経営への発展にもとづく近代都市の形成がみられたのである。それはもはや貴族、高利貸ないし商人が中心の中世的都市ではなく、外部市場を目ざしてするフェルラグであり、分業に基づく協業を基幹組織とするマニファクチュアへの方向を含んだ工業的労働を主要な構成要素とするものであつた。都市は封建領主の生産・原料の独占の対抗しなければならぬのみならず、商品の移動・販路の自由を獲得しなければならぬかつた。そこでは必然に都市による農村の解放が課題にならざるをえない。都市は周辺の農村における封建的支配を駆逐し、その過剰人口を工業労働に吸収することによって、自らの経済的・市民的自由を実現するとともに、農村の封建的生産関係を止揚して農民を解放する方向をとらねばならぬかつた。ただし、新しい生産方法の不断的革新を生産規模の増大と新産業部門の分化とは、古い村落共同体的・地方的限界を超えて発展していき、したがって、古い生産関係、身分制社会関係は都市を中心として至るところに解体をせまられ、新しい契約的社会階級の編成に組みこまれねばならぬかつたからである。<sup>\*</sup> いうまでもなく、この段階における「近代」的体制は未だ極めて幼弱で、資本主義的なものも封建的体制から完全に脱却しておらず、階級関係も未分化で、農民も都市小市民も、ブルジョアも労働者も全人民層が一丸となつても、旧体制打破への統一的戦線を極めて自然に形式しえてい

たのであった。人間の享受すべき自然的自由に対する抑圧、すなわち、自然的な自由に背反する教會的・封建的秩序に対する反撃という点において全人民の利害は共通していたといわねばならない。イタリアにおけるこうした社会的發展は、フランス、イギリス、ドイツなど近代の變革契機の展開にもそれぞれ照応してゐる。新しい社会的進歩のために桎梏となり終つた旧い社會關係を強力に維持しようとする封建的治階級に対して、新興の市民階級はあらゆる被抑壓階級の同盟をえて抗争しなければならなかつたのであるが、そうした歴史的現實に基づいてこれを反映し、これに鼓舞されつつ、近代思想は西ヨーロッパの各地に若々しい芽生えを出したのである。新しい社会的現實は新しい原理を要求した。スコラの神学的な現實解釈はもはや人人の魂を天国につなぎとめることができなくなつた。「言葉」の支配から脱却して生きた現實そのものに接近しようとする意欲は「神の国」の魅力よりも地上の汚濁の只中にこそかえて生甲斐を見出した人人の「思想」を貫串するいわゆる「近代的性格」ですらあつた。ルネサンスもレフォルマチオンも人間が自然もしくは社會の現實にその思想の対象を求めたところに胚胎したのである。

\* こうした点に関しては、M. Kowalowsky; a. a. O. Bd. IV. Ersteskap, W. Sombart; Der Moderne Kapitalismus, Bd. I. u. II. などに豊富な史実をあげて論証してゐる。

\*\* Reformation の社会的背景については F. Engels; Der deutsche Bauernkrieg, u. P. Kampfmeyer; Geschichte der Modernen Gesellschaftsklassen in Deutschland. などの詳細な叙述と分析が役立つであらう。

封建的搾取に対する人民層の抗議は自然発生的な叛乱や革命的な異端運動となつて展開したのであるが、そうした時代の繁囂気の中に成長しつつあつたブルジョアジーは自らの階級的利害を中世的文化に対立する新しい文

化運動の中に打出したのである。自然認識の領域におけるブルノー(Giordano Bruno, 1548-1600)の唯物論的自然哲学やダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci, 1452-1517)の「コペルニクス(Nicolas Copernicus, 1473-1543)」、ガリレイ(Galileo Galilei, 1564-1642)などの自然科学的成果に代表されるすばらしい発展に対応して、芸術の分野にあつては、いわゆるヒューマニストの輩出がみられたのである。ペトラルカ(Francesco petrarca, 1304-1374)の古典研究は Renaissance=Revival of Learning としての時代を特徴づけるものであり、その同時代人であり友人でもあつたボッカチオ(Giovanni Boccacio, 1313-75)の「デカメロン」(Il Decamerone)が描き出した世界は潑刺とした新時代の市民的人間像であり、偽善と虚飾の皮を剥がれた封建貴族や僧侶の裸像であつた。もとより、ヒューマニズムの運動はひとりイタリアに止まるものではなかつた。ルッター(Martin Luther, 1483-1546)やカルヴァン(Jean Calvin, 1509-64)に代表される宗教改革運動もまたヒューマニズムの北方的な顕現形態ともいふべきであらう。ロツテルダムのエラスムス(Desiderius Erasmus, 1467-1536)の「愚神礼讃」(Moriae encomium, sive Stultitiae Laus)が封建的・道徳的虚偽やスコラ哲学に向けた痛烈な諷刺も、ラブレール(François Rabelais, 1494-1553)の「パンタグリュエル」(Pantagruel)や「ガルガンチュワ」(Gargantua)が封建社会の欠陥を衝き不条理を嘲笑したのも、ひとしく、中世的世界の秩序と人間に対する深刻な批判であり、超越者の呪縛から解き放たれた生身の人間の眼で見た新旧両世界の姿であつた。懐疑論者といわれるモンテーニュ(Michel de Montaigne, 1533-92)や、かれの「随想録」(Essais)にみられるものは宗教的教条主義に対する批判であり、反理性的な神の存在やその本質に対する懐疑の表明である。それは封建的制度とその伝統の土台に楔を打込むことによつて、近代の自由な批判精神の展開を準備したものであつた。

ルネサンス時代のイデオロギーにおける成果が右にみたような自然認識や文学芸術の領域にとまらるわけのものでないことは言うまでもあるまい。封建的諸制度の崩壊と市民社会的諸関係の形成との社会的諸過程は、当然に新しい社会・政治理論や理想の形成となって反映せなければならなかった。

中世的世界は浅くはあるが世界的交通によって結ばれた統一体であって、人倫組織の障壁を形づくっているものは、宗教的、身分的、もしくは同職組合的制約であって、国境などというものに第一義的な比重は存在しなかったのである。政治上の絶対主義 (Absolutism) が確立されて、ヨーロッパの各民族が強力な民族国家的結合によって対置されるようになったのは十五世紀も半を経た時期においてであった。「王権は都市ブルジョアの支持をえて封建貴族の勢力を打破り、その本質において民族的な大君主制国家を建設した。」とエンゲルスは概括しているが、農民の法律上の地位が変化し、都市が封建領主の権力的治配から脱却してくるにつれて、領主たちは国内における余剰生産物を封建地代の形式で占取することが不可能になり、集中的封建領主―絶対主義国家はそれらを集中的封建地代―租税の形で収取しなければならなくなった。この租税収入が官廷や国家の経費を賄ったのみでなく、年金とか俸給とかあるいは贈物といった形でかなりな部分が貴族達に払戻されたのである。この余剰物に対するブルジョアジーの執拗な要求とこれを裏づける実力とが、貴族とブルジョアとの共棲する独特な国家形式をつくりあげたのである。けだし、未だ十分に中央集権化の完了していないヨーロッパ諸国では、租税収入をはるかに超えた経費を必要としており、これを賄うためには資金の借入を余儀なくされる状態であったが、しかもこれに信用を与えうる実力をもったのは、その産業活動の結果すでに若干の蓄積をもっていたブルジョアジーだけだったからである。ブルジョアジーの代表者にはそうした国家的寄与に対する代償として身分上のあるい

は経済上の特権が与えられることによって、本源的な資本の蓄積は次第に増大していった。絶対主義国家の外国貿易や工業の保護助成は、こうしていわゆる〈Mercantile System〉を形式したのである。政治形態における絶対主義、経済政策における重商主義（Mercantilism）というのが、ルネサンス・レフォルマチン時代の西欧社会の一般的基本的性格であったということができるとであろう。

\* F. Engels; *Dialektik und Natur*. 「自然弁証法」（岩波文庫）下巻、五頁。

法王の世界的権威を無条件に肯定する中世紀の社会理論—国家学説が、多少のニュアンスの違いはあっても、神政原理にもとづく構成が支配的であったことは見安い道理である。したがって、民族国家の形成期に入ると当然に神権政治（Theocracy）の反民族主義的性格を批判し反対する学説が登場せざるをえない。世俗的國家の権力は「神の子」の地上における真の代表者たる教会によって与えられたものであり、したがって、國家は教會の利益に奉仕すべきものであるとする中世的イデオロゲンにとっては、民族國家の創設は呪うべき冒瀆でしかなかった。だが、本源的資本蓄積の過程は働く者に対する徹底的な搾取によって彩られ、農民の流氓と手工業者の零落によって飾られた時期である。これに対する大衆の反抗は「鎮圧」されねばならない。軍隊と官僚と警察とで強力に裝備された中央集権的國家權力の樹立は一面こうした現実的課題に応えようとするものであったはずである。ルネサンスによって育かれたヒューマニズムの精神は、人民大衆の要求と理想に抛りどころを与えた。超越的権威からの人間の解放、生れながらに自然権をもつ個々の自覚が、いろいろな色合ではあるが人民主権の理論を形成させたのである。ブルジョアの秩序をつくり上げる理論的指導者が、すでに一個の革命的イデオログであったばかりでなく、資本の本源的蓄積そのものに対しても鋭い批判を加えた理論家も現われたのである。

マキャベリー (Niccolo di Bernardo Machiavelli, 1469-1527) やポードン (Jean Bodin, 1530-96) が前者であるとするれば、モア (Sir Thomas More, 1478-1535) やカンパネラ (Tommaso Campanella, 1568-1639) は後者に属する人達であった。

## 二

わたくしは、時代的背景を描くことに紙幅を費しすぎたかのようである。旧制度アンシャン・レジームが自壊した土壤の上に新しい生産＝所有関係が形成されつつある過渡的時代において、新興勢力の各階層の利益を代弁するイデオログ達＝、新しい社会構成のもっとも基本的と思われる財産問題について果してどのような理解と主張を持って臨んでいたかを検討しようというのが、わたくしの当面の課題である。資本主義の黎明期において、まさに生れつつあるブルジョア社会の克服して共産主義社会の建立を夢想する一群の大胆な思想家たちがあつたが、その最初の社会主義的ユートピアの作者であるトマス・モアこそ、まず採上げるにふさわしい人物であろう。

モアの『ユートピア』が発表された当時\*のイギリスはすでにのべたように資本主義の本源的蓄積の段階にあり、いわゆる「困いこみ」＝土地私有化とこれに伴う民人大衆の浮浪人化が社会的課題となつていたのである。資本主義的マニファクチュアによる毛織物工業の急激な発展が牧羊業の発展を促したために、富者はあらゆる欺瞞や暴力によって共有地をとりあげ、更に農民の耕地までもとりあげることによって広大な牧地に変えたのである。土地に隷属せしめられていた農民は封建的な桎梏から解き放たれることによつてたしかに「自由」を得たのである。しかし「この放たれた自由プロレタリアは、彼らが世につき出されるや否や直ちに新興マニファクチュア

よって吸収されるということは不可能であった。他方にまた、旧来の習慣となっていた生活軌道から突然投げだされたこれらの人人が、突如として新しい状態の訓練に順応することもまた不可能なことであった。かれらは、部分的には性癖の上から、しかし大ていは周囲の事情にさし迫られて、おしなべて乞食、盗賊、浮浪人などに転化した。十五世紀の終末から全十六世紀に互つて、浮浪人に対する殘虐な法律がヨーロッパ各国を通じて制定されたのはこのためであつた。<sup>\*\*</sup>モアがその人の下に人臣として最高の地位を与えられ、しかも最後にその人によつて生命を断られたかのヘンリー八世治下の法律(一五三〇年)について、マルクスはさきの引用に引つづく個所<sup>\*\*</sup>でつぎのように述べている。「老年で労働力のない乞食は乞食をする免許を与えられるが、身体の強健な浮浪人は鞭打と監禁の罰を受ける。かれらは荷馬車の後ろに繋がれて鞭打たれ、血の適るまで打たれた後で郷里へなり、最近三年間居住していた場所へなり帰還して「労働する」という誓約をしなければならぬ。何んという悪ろしい反語だろう！ヘンリー八世の治世第二十七年(モアの刑死後―引用者)に、この法律はさらに繰返され、新たに種種の補則を加えてより苛烈にされた。かれらは再度浮浪罪で捕えられると、鞭打ちをうけて耳を半分そぎとられる、三度目には重罪犯人および公安の敵として処刑されることになる。<sup>\*\*\*</sup>こうした絶対主義君主の下に「自由」にされた人民大衆の生活がいかに苦汁にみちたものであつたかは、むしろモア自身に語ってもらふべきであらう。

\* マルクスが *Das Kapital, Erster Bd. Kap. 24, (M. E. I. T.) S. 758. Fußnote 193.* の「トマス・モルス(モア)はあ

る著『ユートピア』の中で『羊が人間を食い尽す』ところの奇怪な国(イギリス)のことを語っている」といつた *De optimo republicae statu, deque nova insula Utopia* は、最初ラテン文でマルギーの L'Anvayn 市から出版されたのが一

五一六年、英文にして母国で出版されたのは一五五一年になってからである。一五一五年にモアはヘンリ八世の使節としてアントワープに行き、ここで実際に通商問題の折衝に当たったことがある。この本は、この時友人のピーター・ザイルスとかれが紹介したポルトガルの旅行家ラファエル・ハイスロディーと話し合ったとき、ハイスロディーが語った大洋中にある島国の理想的社会状態についての聞き書きといった形式で書かれており、その第一篇は当時のイギリスの社会経済に対する鋭い諷刺的批判、第二篇はユートピアの紹介といった結構である。

\*\* K. Marx; a. a. O. S. 772.

\*\*\* モアの半生はヘンリ八世の治下(一五〇九―一四七七)に浮沈を極めた生涯を終った。一五二一年には蔵相、同二三年には下院議長、同二九年には大法官の地位についた。三二年にヘンリ八世はアン・ボレインとの恋愛問題から第一姪カザリンとの離婚について法王と争い、結局はこれを強行して、英国教会のローマ教会からの分離という事件にまで発展したのであるが、モアは宗教的立場から国王の離婚にあくまで反対したため、ついに反逆者として死刑されたのである。

\*\*\*\* K. Marx; a. a. O. S. 773-4.

しばしば引かれるありふれた、しかし有名な文章をわたくしも借用することにしよう。それはカンタベリ大僧ジョン・モートンとラファエルの問答の一節で、残忍な刑罰をもってしても減少させることの出来ない盗賊の必然的な原因について、ラファエルに言わせている。「実はね、猊下、それはお国の羊なんです。もともと羊は非常に柔和で柔順でしかも極めて小食でありましたが、今日では、聞くところによりますと、非常に大食いになり、獐猛になってしまつて、人間までも食いつくし呑みこむそうですね。羊の群が田野も家屋も都会も食いつくし破壊し平らげています。だから御覧なさい。お国で極上の、したがって一番高価な羊毛が産出される地方ではどこでも、貴族や地主やおまけに聖職にあるはずの僧院長たちまでが、めいめいの所領内から従来かれらの先祖や前任者の手許に毎年あがっていた収入と利益に満足しないで、また今まで国民衆民を益するどころか大いに厄介に

なりながら、その安閑と欲楽の生活に満足しないで、耕作用の土地をことごとく取上げました。かれらはそれをすっかり羊牧場として囲んでしまい、家はとり毀し、村は取り払い、立て残してあるのはただ教会堂だけで、それも羊の家にするためなんです。」こんな調子で、いわゆる Enclosing に対するラファエルの摘発はなかなか厳しい。「そこでその郷里にとって疫病神とでもいうべき飽くことを知らぬ一人の我利我利者が、幾千エーカーもの土地を独占して柵や籬でとり囲んでしまい、その地域内にいた農民たちはあらゆる詐欺奸計によって、あるいは暴力的圧迫によって追い出しました。また農民たちは様様の非道な迫害が加えられるので、それにたえかねて仕方なく自分の持ちものを売放させられます。……そしてあてもなく流浪するうちにこの僅かな金銭を使いつくしてしまった暁の彼らにはたして何が出来ましょう。それこそ盗みを働いてやがて型の如く絞首台にかけられるか、あるいは乞食になって漂泊するかなんでしよう。しかもこうして流浪すれば、定職もなく浮浪するというかどて無宿者としてやっぱり牢屋にぶち込まれます。」「こうして僅か少数の人人の不条理な強慾が、お国の主要な福利たるべきものそれ自体を根本的に破壊し、それをお国から剝ぎとってしまいました。……近來はまず浮浪人か遊惰な奉公人かになつたあとで間もなく泥棒になるのが常例なんですがね、もちろん、これらの悪逆について治癒策をお構じにならない以上は罪人どもに重刑を執行なすつたところで何の効果もありません。処罰なるものはいかにも外見は立派で効果があるようにみえますが、それほどに正義でも有効でもありません。\*

\* T. More; Utopia. 春秋社版世界大思想全集、第五〇巻『ユトピア』四〇—三頁。

このような現実を自分自身の眼をもってみたモアのヒューマニズムは、ただ社会悪の摘発や批評でおわらなかつた。モアはルネサンス期最大の思想家といわれるかのロッテルダムのエラスムスの弟子であり親友である。オ

クスフォード大学におけるヒューマニスト・エラスムスの<sup>\*</sup>講筵は、彼を当代におけるイギリス最大のヒューマニストに仕上げたともいえよう。政治家であり経済問題の大家である彼の実際的知見が、そのヒューマニズムの裏づけをえて、イギリスの社会経済的課題を誰よりも明確に把握させ、その根因を明かにさせたばかりでなく、課題の克服をひとつの理想的図式として描きあげさせたといふことができる。かれは社会悪の根本原因を私有財産制度にあるとみた。「モア先生、私の心にあるままを卒直に申しますと、財産の私有が行われ貨幣が絶大な勢力をもっているところでは、国家が公正に統治せられ旺盛に繁栄することは困難です。いや、ほとんど不可能ですつまり、一切の物が悪人の手に入るところにこそ公正が行われ、一切のものが少数の人の間に分配されるところにこそ真の繁栄があるとお考えにならない限りはです<sup>\*＊</sup>ね。」「そこで私がひとりつくづく考える場合に私の心を動かすものは、賢人たちやユートピア人たちの敬虔な制度です。彼らの間では極めて少い法律で社会の万事が甚だ優良かつ裕福に秩序立てられ、その結果、美徳が貴び重んじられております。しかも一切の財物がごとごとく共有で、各人が各事物を豊富に所有しています。翻って、これと反対の立場にある多くの国をみますと、それらは絶えず新しい法律をつくりながら、しかもなお十分満足には行っていないのです。ここでは、各人が自身で手に入れたものを己れの財産とか私有財産とか呼びますが、そこではそんなに沢山の新法律が日日制定されながらも、やっぱり人が自分のものと他人のものとを識別して享有し防護する上には不十分なのです。」こういってラファエル、実はモアは自分の考えがブラトールと一致することをのべ、「この賢者もし万物の平等共有制が採用せられ確立せられるなら、それこそ一国民の繁栄にとって唯一無二の道であることを容易に予見したので、この制度は各人の財産が各自自身の本来特有のものであるところでは実現しえないと私は考えます。なぜならば、

各人が何らかの肩書とか口実とかによって出来る限り多くのものを自分のものとして引寄せ取り取る結果、やがては全財産を僅かの人人の間に分け取りするようになるころでは、たとえいかに豊かな無尽蔵の富があっても、その他の人民は窮乏貧困にまかせられます。しかもこの後の部類の人達こそは多くの場合、前者よりも却って国家の富を享有すべき価値をもっています。何となれば、富める人は強慾で奸智にたけていて公益はならぬのですが、一方貧しい人人は微賤で単純で、しかも彼らの日日の労働こそ彼ら自身によりもむしろ国家に一層有利なものですからね。」<sup>\*\*\*</sup>こういって彼はその批評的な長談議の締めくくりにはいってゆく。「この所有権が駆逐されない限りは、富の平等公正な分配は行われ難く、また完全な富裕は人人の間に永遠に存在しません。この権利が存続する限りは人類中の最大多数でしかも最善部分の間には絶えず貧窮と不幸との重い不可避の負担が存続することでしょう。」こうして彼は法律による規整によって私有の弊害が多少緩和軽減されることは認めるけれども、「各人がおのおのその持物の主人である間は、それが完全に治癒し健全適正な状態にもたらされることは望まれません。」<sup>\*\*\*</sup>と言つて、私的所有制度の害悪について鋭い批判をあげるのである。

\* モアの思想形成に最も大きな寄与をしたと考えられるエラスムスも、その宗教的立場から私有財産制を否定して共産主義的考えをもっていた。すなわち、キリスト教的愛は私有財産を認めないものであるから、真のキリスト教徒たるものはすべてその財産を共同財産とみなすべきであるとしたのである(W. Rüscher; Geschichte der National-Ökonomik in Deutschland, S. 42, vgl.)<sup>o</sup>

\*\* 『エトローピヤ』前掲、六三頁。

\*\*\* 『エトローピヤ』前掲六四頁。

\*\*\*\* 『エトローピヤ』前掲六四—五頁。

だが、モアも共産制を何んの不安もなしに無条件に肯定はできなかったようである。あたかもプラトンの共産的主張に対してアリストテレスが反対説を提示したように、モアはラファエルの意見に反対を表明して、その理由を次のように陳べている。「有ゆるものが共有であるところでは決して人人が裕福に暮せないと考えるのです。各人が労働から手を引込めるところには財貨をはじめ何物にせよ、どうして豊富に存在しえましようか。だれにしたところで己自身の利得のために働かずにいられず、また他人の労役で自分も暮していける見込みがあれば皆なまけましよう。そうなれば、ひとびとは赤貧に追かけられながらも、しかもおのれの手足の労働で獲たものを自分のために保護してくれる法律も権利もないのですから、必然の結果として、そこには不断の反乱と流血の惨事とがありわしないでしょうか。わけても官憲の権威と尊厳とが廃除されており、その住民の間には一切の差別がないような場所がどうしてありうるか、私にはとうてい想像がつきません。\*これは全くわれわれにアリストテレスを思い出させずにはおかない共産主義制度に対する懷疑であり、そのステロ版といってもいいであろう。ラファエルはこれに対して、その意見は無理もないが、「それはあなたが内心で全然これについて想像を働かせていらぬか、あるいはまた、これとは似ても似つかぬ膺物の幻物を抱いていられるからです。\*\*\*」と云って、ユートピアを實際に知らないから起る疑惑なのだから、もしその島に行って風俗制度を實見したら否応なしに承認するはずであるとして、いよいよ第二篇のユートピア見聞録にはいるのである。ここで、わたくしは『最善の状態にある国家に関するラファエル・ハイスロディの話』について、その評細を紹介する興味をもたない。ただし、所詮、『ユートピア』は Mythologie である。モアの歴史的現実に対す旺盛な批判意識から生れたミユトスがかれの知性によって加工され、一つの理想像として投影されたところに、現実的な時空の制約を超えた世界が構成された

のである。たとえ、これがカウツキーの指摘したように、<sup>\*\*\*</sup>いかに革命的な内容をもつものであろうとも、かれが理性および正義の表現として展開した理想国家の姿そのものよりも、その在り方にこそ多くの意味を見出すものである。

\* 『ユートピア』前掲、六五頁。

\*\* 拙稿、『ヘシネンツムにおけるボリス的財産観』(立命館大学人文科学研究所紀要、第一号、一五九頁、参看。

\*\*\* 『ユートピア』前掲、六六頁。

\*\*\*\* Volker des neueren Sozialismus, Dritter Bd., Die beiden ersten grossen Utopisten, Thomas More von K. Kautsky, Thomas Campanella von P. Lafargue, vgl.

『ユートピア』はその第二篇の対談の中でしばしばプラトンを引合いに出して論じている。キリスト教的ユートピア「神の国」が支配していた中世的世界に対決したルネサンスは、歴史的創造が神のものでなくて人間のものであることを目覚させたのである。ヒューマニズムは人間の精神的・社会的福祉について、それが人間自身の解決すべき問題をして知識人を動員したのである。プラトンの復活もまた極めて自然の道程であったといえよう。スコラ的・アリストテレス的中世思想に対する対する新時代の闘争は勢いネオ・プラトニズムを武器としないわけにいかなかった。けだし、「中世史は宗教と神学との他にはいかなる形のイデオロギーも知らなかった」のであるから、初期の近代思想は、必然に古典研究の中からその理論的武器を探し出さなければならなかった。近代社会の発展は新しい生産方法・生産関係の擁立によっておこなわれたものではあるが、その準備は中世末期から近世初頭へかけての商業の高度の発展によってなされたのであった。ここに古代文化の復興の温床をさぐりあてることができる。ギリシアの哲人が描いた共産主義社会は、個人的利益よりもボリス全体の福利を重んずるギリ

シアの国家主義が個人主義的思想と行為とによって脅かされるようになった時代の反動的産物であった。<sup>\*</sup>モアの『ユートピア』もまた、イギリス社会が新興資本主義階級の個人主義的営利活動によって、旧い共同体的生活が解体される過程におこった庶民の悲歌の中から生れたものである。したがって、彼は資本主義社会の形成のための理論的補助者であるよりは、本源的蓄積そのものに対する批判者として、後代の社会主義・共産主義思想の先駆をつとめることになったのである。

\* 拙稿、上掲、一六三―一五頁、参看。

こうして、ヘレンツム崩壊期の商業的繁栄が十五、六世紀の商業繁栄期に似通う歴史的姿態のある限りにおいて、モアの作品がプラトンの『国家』に倣う面が多かったことを認めねばなるまい。だが、超現実的な『国家』の構想が当時のギリシア社会の現実と密接な脈絡をもっていたと同様に、モアの理想郷もまた当時イギリスの歴史的社会的要請を反映していることを見逸せない。すなわち、彼のおこなった社会的害悪の剔抉と、その真因の究明の洞察の上に築き上げた理想社会の構図もまた、すでにのべたような、絶対王政の経済形態ともいうべきマーカンティリズムの反映であるといえる。ユートピア島の地理的条件は、まさに中世都市ないしは領域的封鎖経済の解体の上に現出した集権国家的封鎖経済の理想形態であるし、その絶対君主的地位をユートパス (Utopus) 王に擬することができないであろうか。<sup>\*</sup>ユートピアの内部ではたしかに共産主義制度であるが、その対外政策は明かに重商主義者流の特質をもって描かれている。ユートピアでは有りあまたた財貨は諸外国に向けて輸出するのであるが、この貿易によって「金銀その他の物を驚くほど豊富に貯蔵しており、……彼らが国内に貯蔵しておる一切の財宝も一旦緩急ある場合の戦費に充當するのが目的なのである。しかもそれは特に主と

して外国の軍人を法外の高給で雇い入れるのに用いられる。彼らは自国民を危険にさらすよりもむしろ外国人を雇ってそれに充てる。それは、金さえ沢山出せば敵国人さえ買収することができるし、あるいはまた敵の内部に裏切りをおこさせることによって、戦わずして敵を倒すこともできることを知っているからである。\* \* \*これが隣那に対する大債権国として臨むユートピアの性格である。しかもユートピアの共産主義が古代や中世にみられる「消費の共産主義」でなくて「生産の共産主義」であるのは、無労の民なく、無耕の土地なしというのを理想とするマーカンティリズムの生産力解放思想の反映であるということもできるであろう。シュタインがこうしたユートピア物語を「国家小説」(Staatsromane)と命名して、戦争と浪費とによって極度の財政難に陥入った十六世紀諸国家の権力者に課せられた新しい経済思想、一種の財政学の要求にその成立の動機を見出しているのもまた肯定されねばならないであろう。われわれはここに当代の社会思想に共通した歴史的性格の一面を見出すのである。

\* 「モアはユートピアにおけるコムミュニズムを、一人の啓蒙された君主によって実施させている。」Kautsky, a. a. O. S. 58.

\* \* \* 『ユートピア』前掲、八六一七頁。

\* \* \* I. Stein; Die Soziale Frage im Fichte der Philosophie, S. 211, ff.

## 三

モアの『ユートピア』と同じ系列に立つものとして、われわれはカムパネノの『太陽の都』(Civitas Solis)や

ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) の『新アトランティス』 (Nova Atlantis) をあげることができる。『太陽の都』は『ユートピア』よりも更にユートピア的だといえるかも知れないほどたくましくも奔放な構想力の産物であるようにみえる。ここではモアの『ユートピア』にみられるような現実批判は乏しく、もっぱら理想社会を思弁的に描き上げることに力点を置いている。もちろん、十六世紀のイタリアが経験しつつあった社会経済の実体と無縁であるわけにはいかない。封建的反動の強化によって農民大衆も都市の平民層もその生活苦は並並ならぬ時代であった。「ネーブル市に七万の人間がいますが、その内一万ないし一万五千はほとんど何等の仕事もせず、他は全部過度の労働のために痩せて、日一日と衰弱していくばかりです。無為の階級に属するものは、ただただ懶惰に、婪慾に、不健康に、淫蕩的になっていくばかりで、高利貸をやったり、その他そういうたぐいの罪悪を重ねだし、こうして彼ら自身の使用のために奴隷を養うことによって、多くの家族を墮落し腐敗させ、人人を貧乏に陥入れ卑屈にさせるばかりでなく、特に自分たちの醜惡な罪を全般の上に伝染させているのです\*」このような現実の姿が早くからプラトンに傾倒しており、しかもドミニクス教団員として修道院の共産主義的世界を体験したことのあるカムパネラを刺戟しなかつたとは考えられない。いわんやかれが『太陽の都』の筆を執つた牢獄は、スペイン支配するナポリ王国を顛覆してカラブリア人の民族の解放を企てた政治的陰謀の嫌疑によって与えられた書斎であつたのである。しかし、その著作が大政治家実家サー・トマス・モアのものと同様、きわめて空想的な現実的意味の乏しいものであることは蔽えないところである。その内容に形而上学的神学的臭味の強いのも、彼がイタリア自然哲学の創始であるテレシオ (Bernardino Telesio, 1508-88) の系譜にづらなる自然哲学者である半面に占星術者としての神祕主義から脱却できなかつたからであらう。

\* T. Campanella; Civitas S. J. i. s. 春秋社版、世界大思想全集、第五十卷所収『太陽の都』四〇頁。『太陽の都』は『某騎士莊苑の苑主とゼーアの一船長との間に交された詩的対話』という副題で示されているように、遠くはプラトン、近くはモアの文学的形式をかりた問答式のものであるが、その文学的価値はともかくとして、思想史上の歴史的価値もモアにくらへては、一般に低い評価しか与えられていない。

太陽市民は全く共產主義的制度の中に生活している。一切の市民は平等であり、共同生活のためには自己犠牲をいとわず、エゴイズムは根絶し、商業的交換は嫌悪され、金錢を軽蔑し、労働を愛し、知的芸術的追求をこそ至高の徳目とされている世界である。「彼ら市民は何物をも欠乏を感じない点で皆一様に富者であり、また何物も所有していない点では一様に貧乏人であります。それだからこそ、彼らは何ら境遇の奴隷となる必要がなく、逆に境遇の方が彼らに奴隷として奉仕しているのであります。」<sup>\*</sup>いわば、ここでは人間が物に仕えるのではなくて、物が人間に仕える理想社会が実現していると主張するのである。しかもカムパネラの描いた理想国家は、モアのそれよりもなお一層プラトンの悌げが濃厚である。たとえば「この都の最上の支配者は一人の僧でありまして、その名を Hoh といいます。Hoh とはわれわれの言葉になおして申しますならば「形而上学」とも申すべきでございます。この僧が一切の上に主権者として立っているのであります。現世のことも、永遠の精神界のことも、またあらゆる事業上のこと、法律裁判その他がみな彼によって絶対的權威をもって支配されているのです。」<sup>\*\*</sup>という説明はプラトンの哲人政治の構想を彷彿させるものであるし、また、妻子共有を談じて、「すべて私有財産というものは、各人がめいめいに家や妻や子供達やを所有するところから発生し發達してきたのであり、そこからまた我利我欲が出てくるのです。つまり、われわれが子供に富や榮爵をのこしたり、莫大な遺

産をやるということになれば、自然、国家の財産にまで手を出すということになってくるし、富や階級に属している権力さえあれば人生に何んの懸念もなくなることになるし、また財布が軽く、実行力は乏しく、家柄が卑賤な者の場合には、貪婪で陰險でかつ偽善的になるでしょう。これに反して、われわれが我利我慾を除去してしまえば、そこに残るのはただ国家に対する愛だけということになります\*\*\*「\*\*\*と

いっている点もまたプラトンのステロ版をみる心地がするのである。しかも、わたくしは、彼においてもまた、モアについて述べたと同様に、啓蒙君主的絶対王政の一つの典型と、労働と富裕を基調とした封鎖的国民国家を理想型とするマーカントリズムへの傾斜を見出さずにはいられないのである。彼の構想した「理想国家」はプラトンはもとより、モアのそれよりもさらに細かな設計図として描かれている。それだけに、かれにあっては、モアを襲ったと同じような不安が、その共産国家の実現性に想到した際、おとされたもののようなのである。すなわち、船長が「一体、市民の間では何に限らず一切が共有でその配分は委員の権限にあることになっておるのです。芸術も名誉も欲楽もすべて共有で、何人も何物も自己自身に私有し得ない制度になっております。」と云って、私有財産の発生とその弊害についてさきに引用した部分をつづけるのであるが、これに対して荘苑主に「しかし、そんな境遇におかれたら、誰も働こうという者がなく、他人の労働をあてにし、他人の労働の結果で生きる、つまりアリストテレスがプラトンを攻撃したようなことになりはしないだろうか。」と疑問を呈させている。そしてそれに対する答えはモアの場合と同様に明確さを欠くもので、ただ人人の祖国愛や博愛心や自己犠牲の熱烈さに拠りどころを求めているにすぎないのである。とまれ、カムペネラはルネサンス期におけるすぐれた特異性をもつ代表的人物の一人である。かれの思想には、進歩的なものの中に封建的なものが残存していて、絡み合い屈折した形で作品を構成している

ように思われる。それは彼の共産主義がモアの到達したものよりも古い。「消費の共産主義」的ニュアンスが濃い点にもよくうかがい知ることができるのである。

\* 『太陽の都』前掲、四一頁。

\*\* 『太陽の都』前掲、二四頁。

\*\*\* 『太陽の都』前掲、二八一―九頁。

\*\*\*\* 同右。

わたくしはさきにベーコンの『新アトランティス』を当代一連のユートピア物語として掲げておいたが、いうまでもなくこれもプラトンの「クリティアス」（「アトランティス」）に因んで書かれたもので、航海者が太平洋上に発見した島国の姿を語った未完の遺作である。この作品の特徴は、社会問題を自然科学上の發明発見やその技術的应用によって解決しようという意図にもとづいて構想されている点にあるのである。したがって問題の根因を所有関係にあるとして、その変革によって、社会的課題の克服を試みようとする構想したモアやカムパネラとは全く異った角度からするユートピア物語である。ガリレイの継承者であり、その經驗的実証的方法を科学に導入したベーコンが、その豊かな自然科学的知識を総動員して作製した生産の応用科学的組織のモデルが『新アトランティス』である。この未完の草稿には生産関係や分配問題には何人のふれるところもない。したがって、これはわれわれの当面の関心の対象とはならないものである。ただ、われわれが興味を惹かれる点はモアもカムパネラもともにルネサンス期の高度の教養人、知性人でありヒューマニストであったことであり、だからこそ現実の痛みを治癒させるための処方箋を書き上げることができたのである。しかも彼らとともに自らの処方を試みようとする

はしなかった。この点は後年のいわゆる「空想社会主義」者であるオウエンやフリーエヤサン・シモンなどが、別に「実験社会主義」者と呼ばれるような、たとえ抽象的実験室的なものにもせよ社会的実践を試みたのとも異なるし、いわんや一揆その他の社会運動の渦中に身をおいて、自己の抱く理想像を地上に現成しようという革命家的実践を志したわけでもなかったようである。ベーコンは別として、モアもカムパネラも、私有制度を排して、共産主義にその理想を見出した。しかし彼らの描いたユートピアは、ラマルティエヌのいわゆる「時期尚早の真理」(Les utopies ne sont souvent que des vérités prématurées)なのであろう。それはかのウインスタンリー ( Gerrard Winstanley, c. 1639) に領導された「掘る人」(Diggers) の運動とその失敗が如実に物語るところである。

近代社会主義 || 共産主義の理論的先駆者をトマス・モアであるとすることは何人も異議のないところである。その着想はプラトンに発しているとしても、その共産主義は本質的に別のものである。プラトンの場合は支配階級の維持存続のための装置にすぎない共有制であるが、モアの場合は社会全体の生産分配制度としての共産主義を説いたのである。いわんや中世的宗教団体本位のそれとは全く異質のものである。すなわち「消費の共産主義」から「生産の共産主義」への移行はモアによってはじめてなしとげられたのである。だがしかし、庶民的解放運動そのものの経験はモアの持ちえなかったところである。『ユートピア』は所詮(三) (無)topos (所) || 無何有郷である。理想社会の現成に力点があったわけではなくて、当時のイギリス社会に対する批判を徹底させ浮き彫りにする効果を与えるための対照的社会的提示であったということができる。モアの近代的・共産主義理論がささやかながらも「社会的実践」の姿をとったのは、内乱期のイギリスにおいてであり、とくにディッカガスの

運動においてであった。モアの刑死後地方的な農民の反乱があったが弾圧されたままにクロムウェルの絶対王政打倒運動の成功—ブルジョア的議会政治の擁立をむかえたのである。しかしその改革も農民大衆の満足を買うに足るものでなく、一六四〇年から五〇年にかけて「平等論者」(Levellers)の運動が澎湃として起った。しかし、多くの「平等論者」が政治的平等を主張するに止まっていた中で、ウィンスタンリーの「ディッカース」運動は私有財産に対する攻撃を加えたのである。ディッカースの運動そのものは僅か一カ年ばかり続いただけで不成功に終わったのであるが、「恐るべき力をもった数多くの宣言とパンフレットを残した」のである。

\* たとえば、一五三六年にはイングランドにおける Pilgrimage of Grace、一五四九年には Robert Ket の導くノーフオークの百姓一揆など。

\*\* John Hare と John Lilburne などは、主として政治的平等を主張して国民を煽動したのである。いはば自然的平等の下に生活していたゲルマン族の後裔であるアングロ・サクソン人がローマ化されたノルマン人の侵入以来、自然状態を奪われ、諸種の特権が発生したとして、この不平等な抑圧的秩序からの解放を主張したものである。ディッカースも勿論に Levellers Movements の最左翼に位置するものである (M. Beer; History of British Socialism, Vol. I. Chp. V. 3. cf.)。

\*\*\* M. Berr; ibid. p. 62. ウィンスタンリーの主著ともう一つを参照せよ。New Law of Righteousness, 1649) 又《The Law of Freedom in a Platform: Or True Magistracy Restored, 1652》を参照せよ。《The Diggers Movement in the Days of the Commonwealth》の著者 I. H. Berens は《Law of Freedom》をモアの《Utopia》に比べてこれより更に徹底した平等主義の主張であるとしている。

ディッカースの闘争は、概括的にいえば、理性主義的な、かつキリスト教化された自然法的立場から、土地の私有、民法、および、専制政治、寡頭政治に反対して「われわれは、われわれのパンを備わったり傭ったりし

ないで、われわれ自身が額に汗して獲得することが出来るように、世界から、市民財産の呪咀と束縛とを、腕力によってでなく、正義的に共同して土地を耕作することによって、とり除こうと決心するものである。……また、地上に生れてきたすべての者が、彼らに生を与えた母なる土地によって、世界に君臨する理性にしたがって、育まれるるように、その基礎として、土地を、富者も貧者も含めて、すべての人人の共有財産たらしめようとするのである\*。」と主張している。「ディッカガスの宣言やパンフレットは、ことごとく同じ調子のものであるから、その一つを知れば、全体は判明するのである。」といわれている\*<sup>\*</sup>。ここでは運動の代表的理論家であるウィンスタンリーの一、二の著書の所説にふれて、その大要を知るとどめたい。彼らディッカカス達は、一六四九年にロンドンの近くのワルトン教区内にあるセント・ジョージの岡の土地を掘り起して耕作をはじめたが、そうした行動の正当性を説明するためにウィンスタンリーが執筆したパンフレットの中で、特定な少数者の土地所有を否定するについての二つの理論的根拠を与えているのである。その一つの理由は土地というものは全能の神が全人類に生活のための共通の財宝として与えたものであるということであり、第二の理由は、絶対王権の顛覆にあたってはすべての人民が財布をはたくか血を捧げるかの寄与をしたのであるということである\*<sup>\*\*</sup>。かれは独占的土地所有を絶対に拒否して、何人といえどもおのれの労働の結果として獲るのでないかぎり、それは搾取であると断じた。それでは人は他人より富むことはゆるされないのであろうか。富とは一体何なのか。「富は人をうぬぼれさせ、おごり高ぶらせ、人人を抑圧し、ついに戦争を引きおこすものである。いかなる人も自分自身の労働によってか、他人の労働による協力によるかしないかぎり、富むことはできない。もし他人の援助がなかったら、一カ年に数百万千の財を蓄積することは出来ないはずである。もし他人が援助してくれたのであれば、その富は

自分のものであると同時に他人のものでもある。けだしその富は自分の労働のみならず、他人の労働の果実でもあるからである。しかもあらゆる富者は、自分のでなくて他人の労働によって安楽に食ったり着たりしている。これは彼らの恥辱どころあれ、尊貴たるものではない。何んとなれば、与えられるよりも与える方がはるかに祝福されるべき行為だからである。しかも、富者はすべての持物を労働者の手から受け、他人に与えるものもまた他人の労働なのである。したがって、彼らは地上における正義の行為者ではないのである。\*\*\*このような財富観の中に、われわれは、ウイスタンリーが、すでに宗教的原理から脱却して、啓蒙主義時代において、ほとんどのすべての社会思想家に一般化した労働原理にまで成長しているのを見るのである。

\* これは、ディガガース運動の最も特徴的な宣言として知られている『The True Levellers' Standard Advanced, April 25, 1649』中の一節で、僚友 William Everard ほか十五名のディガガース達が署名して発表したものである(M. Beer; *ibid.*, p. 62-3, cf.)°

\*\* M. Beer; *ibid.*, p. 63.

\*\*\* G. Winstanley; *A Watchword to the City of London and the Army, 1649.* 255-56 (I. H. Berens; *ibid.*, p. 118, cf.)

\*\*\*\* G. Winstanley; *Law of Freedom*. (I. H. Berens; *ibid.*, p. 173, cf.)